

「グリーン・ウォール」の創生
グヌングデ・パングランゴ国立公園
住民参加型森林再生プロジェクト

現地からのお便り

2014年7月23日
コンサベーション・インターナショナル

森林再生事業の進捗

目標の300ヘクタールへの植林を完了し、森林再生地の見回りを参加農家と国立公園レンジャーと一緒に続けています。植えられた木々の8割は良い状態です。残念ながら生き延びることの出来なかった約2万本の苗を植え替えました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

プロジェクトでは、森林再生地を囲むように果樹等の有用な木を植えています。これまでに植えられたグアバ、サトウヤシ、ジャックフルーツ、ランブータン等に加え、今回パンギノキ（現地名 Klewek; 学名 *Pangium edule*）とキャンドルナッツ（現地名 Kemiri; 学名 *Aleurites moluccana*）が新たに加われました。そのままでは有毒なパンギノキの実ですが、下処理をした後にスパイスとして使われます。また、キャンドルナッツからは取れる油は、風味付けに欠かせません。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

2011年に始まったグリーンウォール・プロジェクトの第二期は、7月に新たな期に入ります。第二期の終わり、グヌングデ・パングランゴ国立公園長がプロジェクト・サイトを訪れました。荒廃した土地が地元農家との協同により森林として再生される様子を視察し、プロジェクトの成果を改めて大きく評価しました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

森の恵みを伝える

今期は、プロジェクトを多くの人に知ってもらう機会となるイベントが盛りだくさんでした。ジャカルタにあるオーストラリア・インターナショナル・スクールに依頼され、生徒約 100 人にプロジェクトの紹介をしました。現地にも是非来てね！



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

ジャカルタで4日間にわたって開催された Indogreen Forestry Expo は、3千人が参加するインドネシア最大規模の森林に関するイベントです。プロジェクトを紹介する私たちのブースには、期間中、毎日 300 人程の来場者が訪れてくれました。また、ダイキン・インドネシア社のイベントにも参加し、プロジェクトを紹介することが出来ました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

ジャワヒョウ：ジャワ島の最後の大型ネコ

1980年代にジャワトラが絶滅して以来、ジャワヒョウは、ジャワ島に生息する唯一の大型のネコとなってしまいました。その名の通り、ジャワ島にのみ生息し、ヒョウ柄入りの黄金色の個体と真っ黒な個体があります。ジャワヒョウは、生きていくために1頭あたり6.5-7.7 km²という広い森林を必要とします。しかし、ジャワ島の森林は、既にジャワ島の面積の約1割まで減少し、住む場所を失ったジャワヒョウも500頭ほどにまで減ってしまいました。近い将来に絶滅の危険が高い絶滅危惧種に指定されています。プロジェクトを行っているこの一帯は、ジャワヒョウに残された最後の砦です。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

看板

二つの看板の管理を続けています。Sordog村とPanyusuham村の両看板の状態は良好です。6月、国立公園長もSordog村の看板の前でパチリ。



Sordog村（以前からある看板）



Panyusuham村（新しい看板）

(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

※画像および文章の無断転用はご遠慮下さい。